イタリア旅日記 III

スタンダール

ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）

白田 紘……訳

新評論

訳者紹介

臼田　紘（うすだ・ひろし）

1940年　東京生まれ
早稲田大学文学研究科博士課程修了
跡見学園短期大学教授
専攻　フランス文学

著書　『フランス小説の現在』（共著，高文堂出版社，1982）
訳書　スタンダール『イタリア紀行』（新評論，1990）

イタリア旅日記　II
ローマ，ナポリ，フィレンツェ（1826）　（検印廃止）

1992年5月10日　初版第1刷発行

訳　者　臼田　紘
発行人　二瓶一郎

発行所　株式会社 新評論
〒169　東京都新宿区西早稲田3—16—28　電話　東京(3202)7391　振替　東京 6—113487

装幀　山田英春
印刷　新栄堂
製本　河上製本

定価はカバーに表示してあります
落丁・乱丁はお取り替えします

© 1992 in Japan by Shinhyoron Publishing Co.
Printed in Japan

ISBN4-7948-0128-9 C0026

スタンダール
白田 紘一 訳

イタリア旅日記 II

ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）

新評論

江苏工业学院图书馆
藏书章

イタリア旅日記 Ⅱ／目次

ローマ、ナポリ、フィレンツェ（一八二六）
ド・スタンダール氏著 5

内容目次 255
補遺 261
訳者あとがき 266
参考図版索引 270
事項索引 280
人名索引 306

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

○翻訳の底本にはRome, Naples et Florence par M. de Stendhal Troisième édition, Paris, Delaunay Libraire Palais-Royal, 1826 (édition originale) を用いた。

○原著のイタリック体の部分やギュメで挟まれた部分は、傍点を付したり、『　』や「　」で括るようにしたが、厳密に対応させることはしていない。

○原著に頻出するイタリア語の引用文や作品名等固有名詞は、フランス語原文と区別することなく日本語に訳し、とくに断ることもしていない。

○原註は和数字によって日付ごとにまとめ、それぞれの最後に付した。

○訳注は算用数字によって脚注としたほか、［　］で割注とした。人名については訳注を付さず、人名索引で簡単に説明を加えた。

ローマ、ナポリ、フィレンツェ（一八二六）Ⅱ

ド・スタンダール氏著

ああ、ムッシュウ、どうしてペルシャ人でいられましょうか

『ペルシャ人への手紙』

ボローニャ　一八一七年一月九日

今晩、僕は名誉なことにランテ枢機卿猊下と長時間にわたり会話をした。枢機卿は僕のことを探りたいと思っているのだろうか。しかし、実際、何の役に立とう。僕の抱いた特別な好意の原因が何であれ、まじめな議論における猊下の態度は、ナポレオンのもとでの参事院評議員の態度にきわめて近かった。猊下は評議員よりも、権威をちらつかせず、機知と仕草が多く見られた。本心を隠す必要のある話に近づくと、わずかなほとんど気づかないくらいの微笑が、しばしお互いにとって楽しい話をしましょうと告げる。一週間目にして、猊下は次のように言う。「ムッシュウ、わたくしの気づいたことですが、フランス人で軍人でないものが戦争に行くと、納屋の奥で、藁のなかに眠ったら、気づかずに死人のうえにいたといった話を必ずしますね。同様に、フランス人が枢機卿と出会うようなことがあると、かれらはたいていの場合この教会の大御所たちを、まず、二、三の無神論的な言葉を口に出すと描写したり、次には、アイスクリームを食べに情婦の傍らに行き、もう一晩中彼女と離れずにいると描写するのがつねです。」――「神を悪く言う枢機卿は、猊下、大陸封鎖を悪く言うナポレオンの参事院評議員と同じくらいに居そうです。」

枢機卿が卓越していることは、教皇領ではたいそう議論の余地がないので、この人物が人間の屑でさえなければ、善良である。枢機卿は生涯に二、三度支配者を選出し、おまけに、あらゆる法律を嘲笑している。僕は光栄にも、話したい気持をランテ枢機卿に抱かせることができた。かれは一人の外国人に、軽率からとぶちまける（スフォガルシ）（かれの情熱を表に出す）必要から、ボローニャの住人には言わないような事柄を言う。かれはとくに滑稽につ

いて僕に訊ねる。それが僕の原稿に書かれていると思われたくはなかったのだが。昨日、一時間話したあとで、かれは僕に言った。「さあ、ムッシュウ、取引は平等が必要です。わたくしのローマについての小話と引き換えに、パリの逸話を語ってください。例えば、イ・オ・ベズ・ドゥ・イ・ウ・ラ氏はどういう人ですか。」僕はたいそう混乱してしまった。僕は全然理解できなかったし、枢機卿は立派にフランス語を話していると思っている。僕が窮地から抜け出ようとして、単語を無益に探し、たちまちぎごちなくなっているあいだに、枢機卿は二、三度繰り返した。「イ・オ・ベズ・ドゥ・イ・ウ・ラ氏。――かれはとても力のある人です。どうしてわたくしの質問があなたを当惑させているのでしょう」と最後につけ加えて言う。やむをえず、イ・オ・ベズ・ドゥ・イ・ウ・ラ氏が僕に生じさせたわずかの恐れを、ほんの少しばかり訴えた。「このご仁はお国の陸軍大臣を誤らせました」とかれはつけ加える。この言葉が僕を生き返らせてくれる。僕はジュラのジョベス［ジョベス・デュ・ジュラ］氏[1]のことだと判った。僕が答えたあと、「パリこそが、とランテ枢機卿はため息をつきながら言った。世界の首都です。法廷に引き出される人間でさえ、ヨーロッパ中に知られます。」――「猊下、ローマはアウグストゥスの支配下とレオ十世の支配下で、二回も世界の女主人でした。僕は前者のときより、あとの方に感心していますが。」

ローマの人にローマのお世辞を言うことはいつも不可欠であるために、僕はこんなにも単純な応答を書き留めておく。それは俗なフランス人に、わが国の軍隊の栄光、勝利等についてお世辞を言うのと同じである。枢機卿は夢見がちな様子で、話を続けた。「そうでした。しかしあなた方フランス人が世論の支配者であり続けるなら、ローマは百年後どうな

(1) ジョベス・デュ・ジュラことエマニュエル・ジョベスは、ジュラのモレーズ出身で詩人。モレーズ市長を務めたあと、百日天下のあいだに国会議員となり、王政復古後も再選された。自由派であった。陸軍大臣を誤らせた逸話については不祥。

(2) スタンダール氏が《論理学》と呼んでいるトラシーの『イデオロジー』は、イタリアではコンパニョーニの翻訳によって一八一七年から一九年にかけて十巻で刊行された。『一八一七年版』の七月二十四日付参照。コンパニョーニはロマーニャ地方のルーゴの人である。

(3) ル・プチ本では「王権」とあり、そのあとに「ナポレオンだけが侍従たちを抑えることができた」とある。

るでしょう。」 枢機卿の副官が、重大事として、しかし褒めも貶しもせずに（この機微がローマの高位聖職者の特色である）、人口一万二千の小さな町ラヴェンナで、才気煥発なアンコーナの人コンパニョーニ氏によって翻訳されたトラシー氏の『論理学』が六十二部も売れた[2]、と僕に言った。コンパニョーニ氏は、ナポレオンによって集められたもっとも立派な人たちのうちの一人であり、ナポレオンはかれの噂を聞き、かれをすぐさま参事院の評議員にしたのだった。

この同じ高位聖職者が、ある事柄を僕に言ったが、それはまさにネー元帥の死以来僕が考えていて、打ちあけないよう気をつけている事柄であった。フランスの大きなめざましい幸運のひとつは、ワーテルローの戦いに敗れたことだ。この戦闘に敗れたのは、フランスではなく、……［王権］[3]である。

恋人を六ヵ月前に亡くした社交界のある女性が、悲しみにくれて、つまり人間の運命について思いを廻らして、今晩、長い会話の最後に僕に言った。「イタリア女性は自分の恋人を決してひとつの模範と較べません。二人が親密な仲になるや、かれは自分の仕事、健康、身だしなみに対するこのうえなく風変わりな熱中を語ってくれます。女性はかれを変わっているとか、並はずれているとか、滑稽だとか思わないように気をつけます。どうしてこういった考えになりましょうか。愛しているゆえに、かれを摑まえていて、かれを選んだのです。かれを雛型と比較しようという考えは、隣人が笑うかどうか見て、自分が楽しいのかどうかを知ろうという考えと同じくらい、奇妙に思われます。かれの不可解さが気に入り、そしてかれを見るのは、かれの目のなかに、今自分をどんな風に愛しているかを読

●9　ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もうとするためです。」――「忘れもしないのですが、と僕は言った。あるフランスの女性が一年前に、恋人のなかで気懸かりといえば滑稽に陥ることだけです、と書きました。」――「イタリア女性なら、滑稽の観念を抱いても、とT＊＊＊夫人は続ける。愛情から、そんなものが愛する人のなかにあると思うことは金輪際ないでしょう。」――幸せな誤解だ！　それがこの国の幸福の主要な源泉であることを、僕は疑わない。[1]

僕はボローニャについての三十ページの描写を省略する。それは、ブロス院長の第一巻の最後、三五〇ページに、僕にはとても到達できない上品さで書かれているのが見られよう。[1] 無神論者のラランド氏は、八ヵ月をイタリアで過ごしたが、国のすべてのジェズイットが、居住地についての手記をかれに送るよう命令を受けた。そこからかれの九巻にものぼる平凡な旅行記が生まれた。かれはすべてをジェズイットの眼鏡を通して見ている。しかしこれはよい旅行案内だ。[2] かれは一七七六年に存命しているすべての立派な人を貶している。それはよき父祖たちの慣わしであった。何ものももはや現況（スタトゥ・クオ）を保てない。最良の旅行案内は、ミラノのヴァラルディ書店がその第十五版を刊行したばかりのものである。レイナ、ボッシ、クリストフォリス、コンパニョーニ、そしてミラノのその他の学者が、いくつかの紹介記事を出していた。僕はプロテスタントのミッソンとフォーサイスを薦める。[3] 前者は一六八八年に、後者は一八〇二年に旅行した。またモンテーニュ（一五八〇）やデュクロ（一七六〇）も参照できる。[4]

〔一〕　ここでは人殺しがある。つまり社交界の外側の悲惨な連中は、仲間うちで互いにナイフを振りまわしている。しかし連中の四分の三は六千フラン以上の年金があり、嘘をつくいわれはない。

（1）　ブロス法院長の『イタリア書簡』では第二十章ヌーイー氏（九月十五日付）、二十一章ブランセー氏（九月十八日付）、二十二章カンタン氏宛（九月十九日付）でボローニャの様子が報告されている。

（2）　ラランド著『一七六五、六六年のフランス、イタリア旅行記』（一七六九）のことで、スタンダール氏はこの本の恩恵をたっぷり受けている。

（3）　ミッソンの『新イタリア旅行記』（一六九一、ハーグ刊）とフォーサイスの『一八〇二、一八〇三年のイタリア周遊旅行と遺蹟、芸術、文学に関する見解』（一八一三、ロンドン刊）のこと。

（4）　一五八〇年におこなわれたモンテーニュのドイツ、スイス、イタリア旅行の記録は、『旅日記』として一七七四年になって刊行された。デュクロの『イタリア紀行』は一七九一年に出版された。

（5）　『ペコローネ』（一三七八）はジョヴァンニ・フィオレンティーノの小説集。『デカメロン』風に五十編の小話からなる。その一編「ジャネットの物語」からシェイクスピアが『ヴェニスの商人』の主題を借用したことで知られる。

一七七〇年には、フランスでも嘘をつくことと引き換えに金をもらっていたものはいなかった。したがってみんなが陽気だった。（一八二六年に付け加えられた註）

一月十日

僕はいわば枢機卿のお気に入りになっている。元気な人で、とりわけ夕べの集いの終わりに、風がなま暖かくなったり、吹き止む頃には、しばしば慎重さを忘れる。僕が抱く特別な好意にふりまわされないように、僕は女性についてかれに自由に質問することを企てた。枢機卿が体裁ぶるなら、僕はかれを置き去りにしよう。かれはどんな地位に僕を就けることができるというのか。[一] これまで猊下はこのうえなくおかしな、つまりこのうえなく特異な人物伝を利用して、僕に答えている。というのは少しもおもしろがらせようとはしないからだ。イタリア人は決して自分の姿を無理に作ったりしない。したがって人物像は、わが国の才人物語作家のもののように、どれもが互いに似ているわけではない。物語作家たちの登場人物は、ピカールの喜劇におけるように、いつもほどほどであり、つまり決して独自ではない。わが国の物語作家は画家ではない。かれらは現代の智を作図（これは数学の用語である）し、したがって智を愛する者に何も教えない。かれらの物語は『ペコローネ』[5] とか『ベンヴェヌート・チェッリーニ自伝』とは反対である。イタリア的性格を見抜こうとするなら、これはまず何を措いても読まなければならない本である。ランテ枢機卿はとても才知のある人であるが、しばしばかれの逸話には興味をそそる結びがないのに気がつく。イタリアにおける逸話は、しばしば強烈に、しかしまともで誇張なく、感情

の色合いを描写するだけに終わる。

今晩、秘書がいれば、その美しさとか顔立ちのせいで僕が関心を抱いている女性たちについて、枢機卿が話してくれた独特な見解の一部始終を一巻の本に口述筆記したのだが。[二二]たとえば、僕が味方にすることができなかった男を恋人にしている女性、ネッラ侯爵令嬢。ある男が彼女に激しく恋していた。それはジェノヴァの弁護士で、大きな訴訟で彼女を勝たせたばかりで、六ヵ月のあいだ彼女に毎日会っていた。このかわいそうな恋する男は、帰郷がおびただしく遅れたあと、自分の情熱が希望をもてないのを知って、ジェノヴァに帰ろうとしていたが、出発の前の晩に、サロンで黙って涙を流していると、ネッラは手燭をとり、かれに言った。ついていらっしゃい……。不幸な男だ。

ボローニャには、おそらく、独自の仕方で愛さなかった才女はいない。もっとも美しい一人は、恋人が自分よりもロシア夫人を好きになったので、毒をあおった。その夜、彼女の家に火事が起こったために、彼女は救われた。煙でいっぱいの部屋のなかでもはや意識をなくしている彼女が発見された。籠のなかのカナリヤはすでに死んでいた。この事件は翌日ボローニャ方言のソネットになった。お金に関して以外、将来に対して無頓着なのがイタリア人の大きな特徴である。現在がすべての地位を占めている。女性は恋人が十八ヵ月とか二年間旅行してもかれに貞淑である。しかしかれの方は手紙を書かねばならない。恋人が死ぬと、彼女は絶望する。しかしそれは今日の苦悩のせいであって、明日の苦しみを考えてのことではない。そこから恋による自殺はない。女性から離れて数ヵ月過ごすときには、半分仲たがいして彼女と別れなければならないというのが、恋する男たちのあい

だにある格言だ。ボローニャでは、恋と賭とが流行の情熱である。音楽と絵画は気晴らしである。不幸な恋する男たちの避難所は、政治であり、そしてナポレオン支配下では、野心だった。しかし、このすべてを証拠立てる逸話は、好奇心の強い僕を極度に楽しませるが、アルプスの北では平凡で、ピリッとしたものがないように思われるだろう。それらの逸話はおそらく常軌を逸した魂の持主を生き生きと描いている。しかし常軌を逸していてはいけないのだ。まったく単純に僕の述べる事実は否定されるだろうし、ついで、こういったことを語るのは少し悪趣味だと言い立てられるだろう。パリの社交界はその利益に反すること一切を悪趣味だと宣言する。しかしながら、その利益を非難せずに別のやり方で描くことによって、社交界のやり方の完璧さを疑わせることができる。

社交界は、ここではミラノよりもずっとフランス化されていない。英国人なら言うだろうが、それはずっとイタリア的な根（レイシネス）をもっている。ミラノよりも、多くの熱情と機敏、自分たちの目的に達するための深慮と策謀、才気と不信を、僕は見い出す。

しかし、僕がミラノのしあわせな住人の素朴な振舞いを恋しく思うのは、終生変わらない、と思う。僕はあの地方で幸福は伝染するということを感じた。この原理にならい、僕はボローニャでは下層階級の幸福の程度はどんなものか探求する。僕は町の司祭と親しくなったが、かれは州知事が僕に話しているのを見ているので、質問に答えてくれる。かれはおそらく僕を何か秘密情報部員みたいなものと間違えている。

一七九六年以前に、ミラノでは、厳正さと正義とは何かを疑いはじめていた。ナポレオンがおこなったことすべてを見ても、こうした考えは未だアペニン山脈を跳び越すことが

できないでいる（勿論、トスカーナ地方を除く）。信じがたい悪辣な行為が、教皇ピウス六世の時代のローマで（レプリ事件）、代々の首相、かれらのお気に入り、お気に入りのお気に入りによっておこなわれたが、それらは逸話の宝庫となっていて、ボローニャではたえず繰り返し話されている。十八歳の若者が社交界に入ると、その実直さは、これらの逸話によってすぐさま堕落させられる。かれの第二の教育をするのは逸話である。僕の友人のサラム商人[1]のような下層庶民は、まだ十七世紀のもっとずっとひどい逸話の段階にいる。成功するためには、ボローニャでは、さしあたって、権力をもっている人に気に入ることだ。かれを楽しませることによってでなく、何かしらかれの役に立つことによって。したがって、権力をもっている人の支配的な情熱を知らなければならない。そしてしばしば当人はこの情熱を否定する。というのもかれは男ではあるが、p……[2]である。人間の心についての知識は、したがって必然的にニューヨークよりも教皇の国の方が進んでいる。ニューヨークでは、推測するに、大部分の事柄が合法的に正直におこなわれる。確かに、そこではシェリフの支配的な情熱を知ることはずっと重要ではない。そのうえそれはつねに変わらない。つまり正直な方法で金を稼ぐことである。人間についてのこの深い知識は少しも気持のいいものではないし、それは早くきすぎた老年である。そこからイタリア人の性格喜劇嫌いと、かれらをこの世から抜け出させ、心やさしい幻影の国に旅させる音楽への熱中が生じる。ある国には[3]、三年間、日に八回も嘘をつきながら、一万二千フランの地位にふさわしいようになる人たちがいる。その国では、どんな種類の才知が光輝を放つことになるのだろうか。話す技術だ。したがってこれこれの大臣が、二時間のあいだ、お

（1）サラムとは「サラミ・ソーセージ」のミラノ方言とのこと。
（2）『司祭』と読むべきであろう。
（3）フランスのこと。
（4）レーナル師の著書とは『東西インドにおけるヨーロッパ人の植民と通商の哲学的、政治的歴史』（一七七〇）
（5）フラ・パオロ、本名ピエトロ・サルピは『トレント公会議史』（一六一九）の著者。教皇の世俗権とジェズイット修道会（イエズス会）に反対した。

上品にかつ何も言わずに、あらゆる主題について話すことができるということで称讃される。

レーナル師はイタリアの上流社会の恩人であった。ヨーゼフ二世は偶然にその著書[4]を読み、この王侯以来、オーストリア支配のイタリアで、司祭たちは適正な程度の勢力に縮小されている。ヴェネツィアでは、不滅のフラ・パオロ[5]以来、かれらはもっとずっと巧みに抑えられていた。

ただこうした状況が原因で、一八一七年には、大衆はボローニャないしフェラーラよりも、ミラノないしヴェネツィアでいちだんとしあわせである。ゆとりのある、つまり百ルイの年金があるすべての人から見れば、専制政治はミラノやヴェネツィアではもっと目につき、もっと具合が悪い。専制政治はパリからやってくる政治風刺書や、カフェでの話、考えなしの連中の会合に力を行使する。しかしミラノやヴェネツィアでは、多くの田舎司祭館は陰謀の中心にはなっていない。そうした陰謀は、しばしば恐るべき自由放縦さをもち、しかも小村の半分の家々に極度の不幸と虚しい怒り、たいていの場合はその怒りにともなう悪辣さをもたらす。そんなところに、多数のいきりたった強盗が教皇領を荒らしまわっている副次的原因があるのだ。第一原因は、そこでは産業が正当に報いられないところにある。財産を作るためには、あくせく働き毎年百エキュ倹約するのではなく、きれいな妻をもち……［僧侶］の歓心を買わねばならない。しかもこうしたおぞましい道を辿らなければならないのは昨日にはじまることではない。すでに三百年前、アレクサンデル六世とその息子チェーザレ・ボルジアが、毒をつかって、アストールとその他のロマーニャ

●15　ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com